

〈朗読〉

2日間にわたって行われた今回の国際フォーラムのプログラムでは、専門研究者による発表やパネル・ディスカッションだけでなく、カミュ作品の朗読も3回に分けて行われた。第1回目と第3回目の朗読はフランス語学科のジョルジュ・ヴェスイエール専任講師が、第2回目の朗読は本学在学学生・卒業生が担当した。

第1回目の朗読は第1日目の最後に行われた。朗読テキストは、エッセイ集『夏』より「ティパサへの帰還」と、おなじくエッセイ集の『裏と表』より「生きることへの愛 (L'amour de vivre)」の抜粋であった。本フォーラム全体のテーマ「生きることへの愛」の名を冠するこの短いエッセイのなかから、旅先のスペイン・バレアレス諸島の記憶と、「生きること」「愛すること」とをめぐる瞑想とが重ね合わされる印象的な一節が朗読された。

2日目、午前の部のあとに行われた第2回目の朗読では、まず在学学生の金谷栞里さん、小野寺大智さんが、小説『ペスト』の医師のリッターと友人のタルーとの会話を、つづいて卒業生の高橋玲音さんと小野寺さんが小説『最初の人間』より、アルジェに戻った主人公ジャックが母親と再会するシーンを、そして最後に、在学学生の出月里奈さんと高橋さんが戯曲『誤解』より、マルタと母親の会話を朗読した。フォーラムを締めくくる第3回朗読では、エッセイ集『結婚』

より、生と死をめぐる思索「ジェミラの風」の抜粋、つづいて『最初の人間』においてジャックが父親の墓を訪れ、戦死した父親が自分より若いことに気づくシーン、さらに、世界を「われわれの最初で最後の愛」と歌い上げる『反抗的人間』の一節が朗読された。

朗読を担当した在学学生・卒業生のみなさんは、けっして平易とは言えないカミュの文章を何度も練習し、当日に臨んでくれた。本番では全員が流れるような朗読を披露し、大成功であったと思う。卒業論文の執筆時期とも重なって多忙なかで準備をしてくださったみなさん、指導にあたってくださったヴェスイエール先生にお礼を申し上げます。

(根本昭英)

